

ピアノ アドバイザー



今井 顕

東京に生まれる。私立武蔵高校在籍中に渡欧、ウィーン国立音楽大学に16歳で入学する。8年間の課程を3年で修了し、早くも19歳の時に最優秀の成績で卒業。数々の国際コンクールで頭角をあらわし、コンサートピアニストとして国際的な活動を開始する。その後ウィーン国立音楽大学ピアノ専攻科における日本人初の指導者として抜擢され、数多くのピアニストを育成した。通算24年にもおよぶヨーロッパ滞在中の音楽分野における業績と尽力とに対しオーストリア政府より名誉教授の称号を授与され1995年に帰国、その後国立(くにたち)音楽大学大学院にて後輩の育成に携わった。

ヨーロッパでは旧東独ペーターズ社のショパン原典版全集の『即興曲集』やオイレンブルク社刊『ベートーヴェンピアノ協奏曲第5番「皇帝」』の原典版スコア他、国内ではP.バドゥーラ=スコダ著『バッハ 演奏法と解釈』(全音楽譜出版社)および『モーツァルト 演奏法と解釈』(音楽之友社)の監訳、『初版および初期楽譜に基づくソナチネアルバム』『ソナタアルバム(原典版準拠)』『シューベルト グラーツ幻想曲』(全音楽譜出版社)『モーツァルト ソナタアルバム』(音楽之友社)や『ブルグミュラー25の練習曲指導マニュアル』(東音企画)その他の編纂を担当するなど、出版物も数多い。

国際コンクールの審査員として招聘されるなど、日本の誇る国際派ピアニストとして内外で高い評価を受けている。宇都宮短期大学音楽科客員教授、国立音楽大学名誉教授、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会評議員。

すてきな時間を演出しましょう

大きなホールで演奏できるって、人生の中ではなかなかないことです。音楽に携わっている人にはある程度想定内のシチュエーションでも、一般の人には夢の世界——だからこそ、この貴重な場を大切にしておいに盛り上げ、満喫しましょう。



リハーサルのステージに立ったら

まずは客席に向かってすくと立ち、深呼吸してください。上を向いて、天井の高さもしっかり実感しましょう。コンサートホールの設計者は良い響きを作るために「聴衆の頭上に何立方メートルの空気を確保できるか」を計算して図面を書きます。天井の高さは、決してデザインだけの問題ではないのです。

楽器の位置決めは？

ステージには、すでにピアノが置かれていることでしょう。楽器の位置によって響きが変わるのは事実です。でも、ここはホールのスタッフを信じ、「いつもの定位置」でリハーサルを開始しましょう。アンサンブルの場合はソロリサイタルと少し違う場所での演奏になりますが、あまり気にしないこと。要するに、あなたが「良い音だな」と感じられればそれで良いのです。

リハーサルで気をつけること

まずはまわりを見まわしながらピアノを縦横に鳴らし、ホール全体の響きを楽しんで下さい。大きい音も、小さい音も、鍵盤の端から端までです。

ピアノの音はあなたの目の前に広がっているたくさんの弦の共鳴から発生し、その振動がグランドピアノの大きな響板で増幅され、ピアノの脚を伝ってステージにも共鳴し(だからステージの床下は空間になっている方が有利です)、この響きはステージ奥の反響板にも補強されて客席に流れ出し、ホール全体が楽器になるのです。耳穴に差し込んだちっぽけなイヤフォンではぜったいに体験できない「生の音」とは、まさにこれ！ この素晴らしい音響を、あなたの記憶にきざみ込んでください。

音に時間を与えよう



こうした響きは瞬時に熟成するわけではありません。楽器から生じた音が会場に伝わり、広い空間を満たす空気を振動させ、それが残響も含めたかたちで自分の耳に戻ってくるまでには、思ったより長い時間がかかります。「響きに時間を与える」という意識は、とても

大切なポイントです。そのために何よりも大切なのは、深い呼吸。緊張すると呼吸が浅くなり勝ちですが、それでは音楽が小さくなってしまいます。

リハーサルと本番の落差

客席が聴衆で埋まると、響きは少なからず「デッド」になります。屋外が雨模様ならばその湿度も影響しますし、リハーサル時からスポットライトにさらされている楽器自体の温度も上がっています。本番ではあなたの血圧も高くなっているに違いないし、呼吸も同じではありません。

だから、本番で出した音の第一印象が予想と違って、びっくりしないこと。違っていても当たり前です。動じずにのびのびと演奏を続けて下さい。あせらず、呼吸を深く保つこと。とにかく、音に時間を与えること。最初はむず

かしくても、経験を積むに従ってできるようになります。

あなたはスターなのです



演奏の冒頭では、どうしても自分の指に視線が固定されがちです。そのうち首がすっとのびて視線が上向きになり、視界も広がってピアノの中を眺めながら演奏している自分に気がついたら、それはとても良いサインです。もう少し勇気を出して斜め上を

見つめられるようになったら、これぞプロのポーズ。「インスタ映え」する写真が撮れますよ！「上を見上げる」のは「空間の音に耳が向いている」ということで、大きなホールを満たしている音の響きを、あなたが支配している証拠でもあるのです。

ステージマナーに気をつけて

大ホールでの演奏にはショーのような要素もあります。演奏が第一なのは当たり前ですが、その前後の立ち居ふるまいにも、気を配ってください。これによってお客さまへの印象も大きく変わります。

歩くこと

舞台袖から踏み出すあなたの第一歩から見られています。大ホールではピアノまでの距離も結構ありますが、不安そうに前屈みでセカセカと歩き、お辞儀もそこそこにピアノの前に座ってしまうのは美しくありません。背筋を伸ばし、できれば笑顔で、自信に満ちた歩きを披露して下さい。

お辞儀をする

客席を向いたら、まず一呼吸。客席に視線を向けることが大切です。そして「これから演奏するのがとっても楽しみです。ベストをつくしますので聴いてください。来てくださってありがとうございます」という気持ちを表情にこめて、ゆっくりとエレガントにお辞儀をして下さい。慣れないうちは心の中で「1、2、3。そして、もいちど、1、2、3」とリズムをつけながらカウントするのもいいでしょう。お辞儀をしたあとも、あらためて客席に視線を向けるのを忘れないこと。



日本の常識は世界の非常識？



お辞儀をしたらピアノの前に座りますが、移動の際に客席に自分のお尻を向けずにすむ動線を考えておきましょう。日本では安易に「回れ右」をするルートで椅子に座る人が多いのですが、海外では「お客様にお尻をむける」のはマナー違反となります。とりわけ御前演奏レベルの「晴れの舞台」では注意して下さい。

聴衆として奥の席に割り入る時も、すでに座っている人の面前にお尻を向けて進む日本式のカニ歩きは海外では御法度です。座っている人が椅子から立ちあがり、向きあった形で通してあげるのが本式なのですが…。

アンサンブルのソリスト(たとえば歌手)が、演奏前にステージ上で客席

に背を向けて集中しようとするシーンがしばしば見受けられます。プロっぽい姿なのでついあこがれてしまいますが、「お尻はNG！」とこっそり教えてあげましょう。

笑顔はとても大切です

納得できる演奏ができなかった場合でも、演奏後のお辞儀の時には笑顔を作ってください。口角をむりやりに上げてでも、です。ふだんから鏡の前で練習しておくといいでしょう。

たとえ自分では不満でも、その演奏に対してお客さまが温かく拍手をしてくださっているのに、不機嫌な態度で視線もそらした雑なお辞儀をするのは、「私はもっと上手なのよ。これが本当の私とは思わないでね」といわんばかりの不遜な態度に見えてしまうことさえあります。

逆に、失敗しても何とか見せようとする笑顔からは「残念だったけれど、精一杯がんばりました」という気持ちを感じられて、「次はもっとがんばってね！」とすなおに応援したくなるものです！

さいごに

ステージではある程度の演技も必要なもの。大きな広いステージであれば、なおさらです。この冊子に満載されている他の先生がたの貴重なアドバイスとともに、参考にさせていただければ幸いです。

